

## 近藤潤子先生 タイ王国の国際賞「プリンセス・シーナカリン賞」受賞 ～受賞式に随行して～

学務課長 白石 澄枝 (栄養科 31 回生)

この度、学長、理事長を歴任した近藤潤子先生が、タイ王国のプリンセス・シーナカリン賞を受賞されました。

プリンセス・シーナカリン賞は、タイ王国のシーナカリン・皇太后の生誕100周年を記念して看護・助産及び社会福祉事業の発展に多大なる貢献をされた方に贈られる国際的賞で、日本人では3人目の受賞となります。日本助産師会、日本看護協会、日本助産学会、全国助産師教育協議会の4団体から推薦され受賞の運びとなりました。

授賞式は、10月7日にタイ王国首都バンコクの王宮で行われ、マハー・チャク・シリントーン殿下からプリンセス・シーナカリン賞が授与されました。タイの総理大臣をはじめ政財界の方々、日本大使や各国の大使、プリンセス・シーナカリン賞財団選考委員、タイ王国看護師助産師協議会の皆様等、約400人が参列する盛大かつ華やかな授賞式でした。

授賞式終了後には、タイ放送によるインタビューが英語とタイ語によって進められました。通訳をはさまず直接、英語で受け答えされるそのお姿は、長きに亘り海外においても看護、助産の教育と普及に尽力されてきた近藤潤子先生のグローバルにご活躍されてきたご様子を実感するものでした。

近藤潤子先生は所属機関の教育業務と並行して看護系大学が6校だった1970～80年代に、日本初の私立大学大学院の看護学修士課程、博士後期課程の開設に先鞭をつけ、さらに、日本看護科学学会や日本助産学会の創設ならびに初代理事長を務め、日本看護系大学協議会の結成を助け、設置基準案の作成など、その後の看護教育の質の向上に貢献されました。日本助産師会会長就任中には、助産師理念、定義、倫理綱領、役割責務を含む基本文書「助産師の声明」、「コア・コンペテンシー」の成文化を進められました。2004年には助産師教育の新しい取り組みとして天使大学大学院助産研究科（専門職大学院）を開設し、2007年には助産師教育機関の認証評価のための日本助産評価機構の設立に貢献されました。

海外においてはエジプトの看護教育発展のために国際協力事業団（JICA）専門家として29年間、エジプト保健人口省、カイロ大学小児病院、カイロ大学看護学部教育施設・教育プログラムの向上・拡充に貢献されました。この間、エジプト政府と協働で15年間にわたりアフリカ諸国の看護リーダー研修プロジェクトを実施されました。国際助産師連盟（ICM）では9年間アジア太平洋地域の代表理事を務められ、世界の助産師活動に参画されました。

プリンセス・シーナカリン賞は、実践者を重要視し、リーダーシップが発揮され、献身的で管理能力が優れている看護師・

助産師で、国または国際レベルにおける看護・助産、健康、政策への意義ある行動があり、顕著な成果があった看護師・助産師に与えられる褒章です。これまでの近藤潤子先生のご功績を振り返りますと、誰もが納得されるご受賞であったと思います。

授賞式をはじめ関連する様々な行事出席のため随行させていただき、あらためて、近藤潤子先生が、看護、助産の教育と普及に多大なるご貢献をされてきた事が、世界的なレベルで評価された事に、天使大学の同窓生として、また天使大学の職員として、大きな喜びであり、誇りに感じております。

近藤潤子先生のご受賞を心からお祝い申し上げます、随行報告とさせていただきます。



タイ看護師助産師協議会主催「祝賀晩餐会」でのスピーチの様子



タイでの授賞式（マハー・チャクリ・シリントーン殿下からプリンセス・シーナカリン賞が授与されました）

## 研究室紹介

## 認知症の人と家族とともに歩む研究

私が認知症の人と家族の研究を始めるきっかけとなったのは、学生の実習でした。実習病棟は認知症（当時は痴呆症）の急性期病棟で、様々な症状を有する方や対応に困った家族と出合いが、私にとっての認知症に対する興味を醸し出した所以でした。さらに実習の中で、学生が受け持った患者が「いっぱい、いっぱい」と嬉しそうに言うことに学生がいっぱんの意味が「実験に携わっていたその人にとって休憩の時に煙草を吸う楽しさを意味する“いっぱい”であることを探りあてた時の喜びを今でも時々学生には話しています。

そこでの体験を契機にして、大学院に入学する際の研究テーマとして「認知症の人の介護における価値」を挙げて、認知症に関する研究の第一歩を始めました。その時に介護の価値としたのは、当時は介護について負担という面の研究しなく、介護することで家族が得られることもあるのではないかと考えて「価値（負の価値も含めて）」としました。この研究テーマで研究することで、多くの認知症の人や介護する家族と知り合うことができ、今でもその方々との出会いは私の宝であり、学ばせて頂くことが多い私の師匠でもありと考え、その関係は今でも続いています。

続いて、文部科学省の科学研究費補助金での若年認知症（65歳前に認知症となる）の人と家族へのアートセラピー（芸術療法）



看護学科教授 小澤 芳子

を主催するようになり、研究のテーマが認知症高齢者から若年認知症の人へと変わりました。その中で、若年認知症の人は認知症高齢者と異なり、仕事を続けることが困難となるために子供たちの進学・就職・結婚にも影響することを知り、科学研究費補助金を頂きながら介護者・子供への研究を進めていきました。現在は「若年認知症の親を持つ20歳以下の子供」を対象に親の病気が子供にどのような影響があるのかについて学習や人間関係、進学などの面からインタビューを行っています。この研究費をもとに国際学会に参加し、認知症の最新の情報や研究者との交流や研究について意見交換する機会も増えており、時々海外からもメールで研究への問い合わせもきます。

今後は、現在高齢者のケアは在宅という国の施策があることから、「認知症高齢者が在宅で最期を迎えるための支援の構築」というテーマで、生命保険会社などから研究費を頂きながら研究を進めています。具体的には認知症の人が自宅で人生最期の時を迎えるための支援について、高齢者にかかわる人たちにどのような支援が必要かなど検討しています。

認知症の人と家族との出会いが私の研究の原点であり、看護の原点であることを認識しつつ、出会った人これから出会う人から多くのことを学んでいきたいと考えています。

## 小腸パネート細胞を介した食品の作用について



栄養学科助教 高桑 暁子

私は栄養学の中でも食べたものが体の中でどうなるのか、「身体によい」と言われる食品は身体の中でどのような働きをしてよいのか、ということに興味があります。腸管は摂取した食品の消化吸収を行うと同時に、経口的に侵入する病原菌や腸内細菌などに対して免疫応答を担う器官でもあります。そこで、消化吸収と免疫の最前線である小腸上皮細胞のパネート細胞を研究テーマとする北海道大学大学院生命科学院 自然免疫研究室の博士後期課程大学院生として、パネート細胞を介した食品の作用について研究しています。パネート細胞は細菌刺激に反応して抗菌ペプチドであるαディフェンシンを分泌し、共生菌は殺さず、病原菌を選択的に殺菌することで腸内細菌を制御することが知られています。またパネート細胞の分泌するαディフェンシンの異常が肥満症や炎症性腸疾患などの疾患と関連することも報告されています。パネート細胞のαディフェンシン分泌のメカニズムは明らかになっていない点も多く、私は食品成分や栄養素を認識しαディフェンシンを分泌する可能性があるのではないかと考えました。

マウスからの単離小腸陰窩に3種類の短鎖脂肪酸と20種類のアミノ酸を暴露し、Sandwich ELISA で定量した結果、酪酸とロイシンがパネート細胞からのαディフェンシン分泌を誘導することを初めて明らかにしました。酪酸とロイシンによって分泌誘導されたαディフェンシンは、病原菌への殺菌作用を示すことも確認しました。また、qPCR、Western blot、免疫染色蛍光法によりパネート細胞は酪酸を認識する受容体 Gpr41、アミノ酸トランスポーター

であるslc7a8を発現することを確認しました。さらに、三次元小腸上皮培養系であるenteroidを用いて、Gpr41やSlc7a8の阻害剤によってパネート細胞からの顆粒分泌が阻害されることを示しました。以上の結果より、食品成分や栄養素がパネート細胞に発現する受容体やトランスポーターを介して認識され、パネート細胞からのαディフェンシン分泌を誘導することを明らかにしました。

これらの結果は、食品成分がパネート細胞のαディフェンシン分泌を介して腸内環境のバランス維持に貢献するという新しい概念を示すと考えています。研究成果の詳細は以下で見ることができます。Nutrients 2019, 11(11), 2817; <https://doi.org/10.3390/nu11112817>

さらに、昨年度から科学研究費補助金に採択され、「離乳食の新たな指標としてのαディフェンシンによる腸内細菌叢制御の解明」というテーマの研究もスタートしています。パネート細胞のαディフェンシンは乳幼児期についても正常な腸内細菌叢の形成に働き、乳児の腸内環境の発達にも関わると考えられます。分泌されたαディフェンシンを乳幼児期の腸内環境発達の指標とし、離乳食を進める上での新しい指標として活用できるのではないかと考えています。

今後も小腸の自然免疫と共生を担うパネート細胞と食品の関わりを通して、ヒトの健康に寄与する食事について明らかにしていきたいと思っています。

## ドイツ留学を通して学んだこと

私の研究テーマはドイツ哲学です。K. ラーナーや R. グアルディニ、E. ショッケンホフと言ったドイツの思想家の研究をしています。私自身はもともと法学部の出身です。出身校である慶應義塾大学の4年次に縁あってミュンヘン大学に留学する機会がありました。ミュンヘン大の政治学部はショル兄妹研究所と言います。戦時中ナチスに抵抗して、ハンスとソフィーという二人の兄妹が絞首刑になりました。その兄妹の名前を掲げた学部です。ミュンヘンでの学生生活ではいろいろな事を学びました。紹介された下宿先では、掃除や洗濯、片付けの仕方などをみっちり仕込まれました（笑）。レーバーさんというこてこてのパバリアン（ミュンヘンのあるバイエルン州の人をこう呼びます）に徹底的に仕込まれました。でもこのレーバーさんとの出会いがその後の私の人生に大きな変化をもたらしてくれたのでした。レーバーさんご自身は独身で、すでにお母様は亡くられておりました。でも誰に対しても隔たりなく親切な方でした。それはアジア人である私に対してもそうでした。お兄様はロシア戦線で亡くなられ、若いころのお兄様の肖像画がいつも居間に飾られていました。レーバーさんに連れられて、何度も障がいをもった方々のところへボランティアに行く機会がありました。それが日本に帰って来てから手話を習ったり、脳性麻痺の友人を持つたりすることに繋がっていったのかなと思います。ベルリンにも行きました。当時のベルリンは、アメリカ軍とフランス軍、イギリス軍が統治していました。周囲を壁に囲まれた陸の孤島で、それは異様な景色でした。東側に入るにはアメリカ軍が管轄しているチェックポイント・チャーリーを抜けてから、東側の検問を通ります。その



教養教育科教授 堀井 泰明

先には素晴らしい美術館が目白押しです。たとえば、ベルガモン美術館です。ギリシャのベルガモン遺跡からドイツ軍が奪ってきたたくさんの美術品が展示されています。ただ東側の様子は西側とは全く異なっていました。多くの東側の国民は当時とても貧しい暮らしを強いられているようでした。東側で飲んだコーヒーが全く美味しくなかったことを今でも覚えています。ベルリンの壁が崩壊したのはその一年後でした。帰国してからはさらに一つの大きな出会いがありました。イエズス会のリーゼンフーバー神父様との出会いでした。たまたま神父様の出身校に自分が留学していたことがご縁となり、その後上智で開かれていた神父様の研究会に参加する機会を得ることになりました。そして2年ほど後に神父様の下でカトリックの洗礼を受けて頂きました。リーゼンフーバー神父様には私達の結婚式の様式もお願いしました。神父様は現在、上石神井にあるロヨラハウスで静養されています。でも彼との出会いがなければ、今の自分はなかったと思っています。ミュンヘンを去る日、レーバーさんは私に亡くなられたお母様が編んでくれたセーターを下さいました。あなたに持ってほしいと言われて。オレンジ色のそのセーターを私は今でも大事に持っています。その後もミュンヘンには何度も行く機会があり、その都度レーバーさんのところに立ち寄りました。レーバーさん自身は5年前に亡くなりましたが、今でも彼女から教えてもらったことは私の心の中に残っています。皆さんも是非今しかできないことにいろいろチャレンジして下さい。それが必ずや皆さんの視野を広げてくれるはずです。

## 実習後のナラティブカンファレンス

### 1. この研究を行った理由

当大学院では、専門職として質の高いケアが提供できる助産師を育成するために豊富な臨地実習（以下実習）を行っています。そのような環境から、実習を通して学生の教育のための研究を行いたいと考えました。

ナラティブとは、「対象者がリラックスした状態で語りたいことを語ること」です。実習時学生が行うカンファレンスは、自分のケアの振り返りが主な内容となるでしょう。しかし、ナラティブカンファレンスでは、学生が語りたいことを語るため、その内容は自己のケアにとどまることはありません。実習について学生が何を語りたかったのかを明らかにすることがこの研究の目的でした。

### 2. 研究概要と成果

ナラティブカンファレンスは、研究への協力を得られた学生5名に対し、実習終了後2週間と3か月の2回行いました。私は、実習で多くのことを学んだ学生は自信に満ち堂々と自分の成長を語るのであろうと予測をしていました。ところが、学生の語った内容は私の思いもよらない内容だったのです。

第1回ナラティブカンファレンスで学生が語ったほとんどの内容が、どれだけこの実習を続けていくのが困難であったかということでした。分娩経験件数へのプレッシャー、人間関係の難しさ、劣等感などと闘いながら実習を乗り越えてきたということでした。



助産研究科講師 三浦 恵津子

第2回ナラティブカンファレンスでは、実習はつらいことがたくさんあったけれど自分や他の学生の成長への気づきや、話をする聴くことの大切さを認識したことで、理想とする助産師像へつなげたとても前向きな語りが聞かれました。

このように大きく語りが変化したのは、第1回ナラティブカンファレンス後、繰り返し学生同士で自主的に話し合いを続けた結果であったのです。このことで、学生の無限大の可能性とグループ・ダイナミックスの効果を目の当たりにしました。本当に学生は力強く、立派だと心から感心しました。

### 3. 研究成果の活用と今後の研究活動について

私はこれまで臨床指導者としてまた、今は教員として実習指導を行い学生を見てきましたが、本研究結果から想像以上に学生は自分の気持ちを封じ込めていることを知りました。そこで、私たち教員は自己の実習経験を省察し意見交換しながら学生と教育者との関係性について検討をしました。当大学院では、メンターシップを取り入れいつでも学生の話の聴ける体制を作っています。しかし、学生は自分の評価を気にしたり忙しい教員に遠慮をしている部分もあると考えます。長い実習期間であればこそ、学生のこのころのケアが重要です。学生が気軽に話ができる教員との関係性を日常において教員から作り上げていく必要があると考えます。

## ボランティアをとおして

本学学生達は、ボランティア活動をとおして、様々な社会経験や自分たちとは異なる世代との交流をさせていただいています。ここでは、そんな学生達の活動の様子を紹介させていただきます。

### ～参加者から学ぶこと～



栄養学科2年

布上 夢香

私がNPO法人Efyの活動に初めて参加したのは、大学一年生の時でした。一年生の頃は、ただ企画に参加するだけでしたが、今年度はコアメンバーとして、自ら企画を考え運営を行いました。

企画・運営に携わる中で、企画書を作成したり、児童会館の方と連絡を取ったり、当日のスタッフ

を募集したり、当日を迎えるまでに多くのことを逆算して考えなくてはならないことを学びました。また、企画を考える中で、対象者は小学校低学年なので、興味をもってもらえるように座学ではなく、実際に見たり触ったりできる活動を多く取り入れたり、集中力が続く工夫を考えるなど、対象者の立場になって考えることの大切さを学びました。

企画を運営する中では、子どもたちから学ぶことが多くありました。子どもたちの「なんでもやってみよう」と挑戦する

気持ち、フードロスの勉強をした後の、「これを残したらフードロスになるんだよ。ちゃんと食べなきゃダメ!!」などと子どもたち同士で声を掛け合い、すぐに行動に移そうとする意識の高さにはいつも驚かされます。また、レシピを考えるときには、じゃがバターの開いている部分をお花に見立てるなど、子どもらしくも斬新なアイデアに感心したことも思い出されます。

活動前は、私たちが子どもたちに食育を行う。という姿勢で企画を考えていましたが、活動を通して私自身の方が子どもたちから学ぶことが多く、互いに学び合いながら企画が成り立っているという意識に変わりました。

今後も子どもたちとともに自分自身も一緒に成長できる場であるEfyの活動を通して、様々な企画を考えていきたいと思っています。



### ～苦手意識の克服～



栄養学科2年

服部 環子

私はNPO法人Efyで主にEfyFARMという企画を運営しています。

EfyFARMとは、児童会館の畑で野菜を育て、子どもたちがその野菜を使用したメニューを考え、調理し、カフェを開いて地域の方々に提供するという食の循環を学ぶことを目的としたプログラムです。

私はこの活動を始めるまで、初対面の人と会話することが苦手でした。しかし、活動を通して児童会館の子どもたち、先生方、地域の方々、他大学の学生など様々な人とコミュニケーションを取る機会が増えたことで、苦手意識を克服することができました。また、自分の意見を伝える、取材を受ける、プレゼンするなど今まで避けてきたようなことも積極的に取り組むことができるようになりました。

この活動のやりがいは、参加して下さる方々の反応です。病気になる外出することが憂鬱になったという女性が「NPO法人Efyで大学生や子どもたちが活動している姿をみて、元気がでて外出する気になった」と言ってくださったことがありま

した。また、子どもたちは「トマトが嫌いだけど自分で作ったから食べてみる!」や、「おいしかったからお家でも作ってみよう!」などと楽しそうに活動に参加してくれます。こういった声を聞くと地域で活動する必要性や子どもたちにもっと食の大切さを伝えていきたいと感じます。

また、一年間この活動をして小学生の食生活が乱れていることや料理経験が少ない子が多いということに気が付きました。次年度は、こういった課題を少しでも解決できるようにプログラムを改善し、子どもたちがより楽しく食について学ぶことができるような活動をしていきたいと考えています。



## ～挨拶から生まれるもの～



看護学科1年

石原 ひなの

募金にきてくださる地域の方々といった多くの人たちと接することができるチャンスだと考え参加を決意しました。

24時間テレビのボランティア活動を通して私は多くのことを学びました。その中でも一番印象に残ったことは挨拶の大切さです。挨拶はコミュニケーションのきっかけを作るものである

私は8月24-25日に放送されていた24時間テレビのボランティア活動に参加しました。私は将来看護師になるという夢に向け、多様な人たちとコミュニケーションをとることができる機会を探していました。この24時間テレビのボランティア活動ではテレビのスタッフの方々はもちろん、同じボランティアの方々や

と同時に、笑顔を作るものであると感じました。ボランティア活動をしている際子どもからお年寄りまで、健康な人から障がいを持った人までと幅広い人たちと出会いました。その中でも共通して言えたのが挨拶を交わすことで両者ともに自然と笑顔がうまれ表情も心も明るくなるということです。またそこからそれを見ていた人たちに笑顔が伝染し、場の雰囲気全体が明るくなるのがわかり、挨拶のすごさを感じました。そしてもっと驚いたことはボランティアを終えた数日後です。普段通り挨拶をしていると自分でも気づかないほど自然に笑顔が作れるようになっていました。そしてアルバイト先でも「いい笑顔だね」とお客さんから言われる機会が一気に増えました。このボランティア活動を通して、学び、得た経験は私にとって大きく変化を与えたものでした。そして将来に繋げていけるものになったし、貴重で意味のある体験だったと感じました。

## ～知識と体験の一致～



看護学科1年

福井 沙智佳

今回のボランティアをさせていただいて、感じたことは、自分が考えていたよりも子どもの体力があり、自分自身の小学生時代よりもゲームやスマホといった電子機器が普及していることを知ることができました。

ボランティア活動は武蔵先生が、講義の終わりに子ども食堂に興味がある方はやってみないかと話をしてくださったのが興味を持つきっかけになりました。私は、小児看護に興味を持っており、子どもに関わるボランティアで一度は関わってみたいと考えていたのでやることにしました。また、高校時代から気になっていた子ども食堂というのがどのようなものなのか知りたいという興味もありました。

子ども食堂のボランティアは、夏と秋にさせていただきましたが、子どもたちが、当初自分が考えていたよりも私のことを覚えていてくれており、私が思っているよりも、子どもたちは楽しかったことや嫌だったことについてすごく覚えていることを学びました。

また、子どもたちとコミュニケーションをとることは、簡単だと考えていましたが、実際は、難しく、コミュニケーションの方法について考えていくきっかけになりました。

これらのことは、ボランティア活動をとおして子どもたちと関わらないとわからないものでした。

更には、講義で先生たちが「患者さんは、いろいろな事を覚えている」ものだよという話を身をもって実感することができました。

これからはいろいろなボランティアに参加して自分の知らないことを知りたいと考えています。

### つれづれ考

理学療法士による  
本学教職員による  
「つれづれ考」第14回

#### 天使大学を去るにあたり

つれづれなるままに研究室の机に向かい、アツと言う間に20年が過ぎ、定年退職を迎えさせてもらいました。開学に合わせて本籍地の柏から札幌に移住し、着いたその日が有珠山噴火でした。20年間、公私ともに、色々な出来事が起きました。私事では、二子の誕生後に4年間だけ家族だけで札幌に生活しました。その間にロンドン大学 King's Collegeの博士号を取得しました。それから14年に渡る単身赴任生活、そして今、2番目の子どもが大学受験を迎えての定年退職です。

大学生活では、学術振興委員長、学生部長、教養教育科長、初年次教育等検討WG座長、入試委員長、FD委員長、海外研修責任者、天使大学教職員組合代表などを勤めさせていただきました。私にそんな、と思いましたが、それでも、かなりの成果が出せたのは、これも一重に一緒に働いたスタッフとそれを応援して下さった教職員、同窓会の皆様の賜物と心から思っております。

なかでも一番感謝したいのは学生(含む卒業生)たちです。家や研究室で焼き肉や鍋に付き合ってくれた学生たち、お茶しに研究室に来てくれた学生たち、印象的だったのは、留年直後は「コーヒー飲ませて下さい」が、卒業時には「コーヒー入れに来ました」に変わった学生です。そんな付き合いで、本質をつく疑問を沢山ぶつけてくれました。「アセンブリの目的は主体性を育成するため」に対して、「先生、だったら(強要する)主体性ってなんですか?」と聞いてきたり、「QOLは『生活の質』と習いましたが、生活の質とは何ですか?」(学生と

教養教育科教授 田島 忠篤

考えたベストアンサーは「(疾病になっても)その人らしい生活」)、教員から「社会に出てやってけない」と言われた学生が「じゃ、大学しか知らない先生は社会でやってけるんですか?」と詰問してきたり、他愛もないやり取りですが、深く考えさせられました。大学教育とは、それでも、先生と呼び、研究室まで足を運んで、本音で話してくれた学生には感謝しても感謝しきれません。

とりわけ艱難辛苦に出会っても、必死にそれを乗り越えようとする学生の姿に勇気づけられました。登山に惹かれ他大学を棒に振り、編入学して専門職業人となり、山と仕事、己の生き方を求道する学生、何度も留年しながら国家試験に合格して立派に働き、良き親となり新築一戸建てに住む学生、在学中倒産に合いながらも自力で卒業し、専門職業人として働く学生、ハイチ大地震時にJAICAの看護師長として過酷な中でミッションを完遂した学生、障がい児を育てながらも自力で職業人として働く学生、身近な人との離死別、辛い体験から生きる意味を自力で見出し、それを語ってくれた学生、様々な理由で退学した学生、そして己の病と冷静に立ち向かう学生等々。卒業後も続く人間関係は、学問的にも個人的にも沢山のことを私に教えてくれました。そんな学生に負けまいと、弱った体に鞭を入れて、どうにか20年過ごすことができました。そんな邂逅の場、天使大学、私は共に働いた教職員、学生の記憶と共に忘れることはないだろう、それを糧に次に進みます。

## 礼文島に卒業生を訪ねて

天使大学の学生は、大学のある札幌市内だけではなく、全国にその専門性をいかして活躍をしています。今回は、礼文島に就職した卒業生とその卒業生の活躍を訪ねた在学生在に感想を聴いてみました。

### ～食・自然・人との接し方を学べた3日間～

栄養学科3年 松本 実里

私は8月上旬にたべテるとして礼文島へ行きました。これまで、たべテの活動が農業中心であったことから、新たな試みとして漁業について学びたいと考えました。そこで、礼文島へ就職した先輩である静香さんに相談したところ、快く引き受けていただき、この遠征を実現することができました。

漁業体験ではウニの殻向き、魚の網外しを体験しました。ウニは市場に出せるものと出せないものの分別をしながら作業が行われていました。網外しでは、1匹の魚を網から外すのも難しく、時間がかかりました。魚は収穫、加工され私たちの元へ届くと考えていましたが、その過程の中にも網外しなどさらに細かな過程があるということを実感することができました。

さらに、ほっけ、ウニ、昆布、なまこなど多くの海産物に触れることができました。ウニのスープや、ウニと生ハムの丼物など一つ食材に対しても多様な食べ方ができ、身近な食材に対してどのような調理ができるかをより学びたいと感じました。

トレッキングでは、礼文ならではの花や高山植物を見ました。夜には満点の星空を見ることができ、北海道の自然の豊かさを感じることができました。

※たべテの「食を通して未来を明るくする」ことを目的とした本校のサークル

また、礼文町の医療・介護について考えるワークショップに参加させていただき、礼文町の特性についても学ぶことができました。札幌に比べ、礼文町は地域間の関わりが密接でした。また人口減少や働き手の不足が問題点として挙げられており、札幌のように医療従事者が沢山いることが当たり前ではないということを知ることができました。

礼文島遠征を通して新たな学びや、感動することがたくさんありました。どう感じたかを部員間で語り合うこともでき、より学びが深まったのではないかと思います。食に関して学びたいという仲間が身近にいる環境に感謝し、これからも大切にしていきたいと思いました。

卒業生の加茂静香さんをはじめ礼文島の方々が温かく私たちを迎えてくださり、沢山の経験をさせていただくことができました。ワークショップや漁業体験など多くの場所で地域の方が積極的に話しかけてくださいました。この遠征で地域の方と関り、漁業についてだけでなく、優しく、相手を受け入れる姿勢をもって人と接することの大切さも学ぶことができました。この経験を忘れずにこれからの大学生活も頑張ります。



漁業体験後の集合写真



漁業体験中①



漁業体験中②



## 礼文島はこんなところですよ!

礼文島は、稚内市の西方60キロメートルの日本海に位置する最北の離島です。太古昔、大陸から切り離されたこの島には奇跡的な自然が今なお残されており、夏には約300種の高山植物が咲き誇る花の島として知られています。

- 人口：2,465人(令和2年1月末現在)  
 産業：漁業と観光  
 気候：夏期は冷涼で、冬期は温暖。  
 魅力：①礼文島にしか咲かない花「レブンアツモリソウ」  
 ②北の海が育んだ新鮮な海の幸  
 「ほっけ」「うに」「昆布」「たら」  
 ③自然景観と300種の高山植物



礼文町マスコットキャラクター「あつもん」

礼文島観光協会HP

## 島の管理栄養士と後輩の訪問



礼文町役場町民課保健推進係  
管理栄養士 加茂 静香 (栄養学科16回生)

私が就職した町は、北海道稚内市よりもさらに一歩先にある島、礼文町です。主に観光や一次産業（漁業）が盛んな町であり、豊かな自然と、おいしい海の幸があります。私が島の管理栄養士を選択した理由としては、求人があったということが最初のきっかけです。また、人生のうち一度島で暮らしてみたい、田舎が好き、島の生活や医療、福祉の仕組みを知りたい、素晴らしい自然を感じ、おいしい海産物を食べたいなどの気持ちがあったため島の管理栄養士を選択しました。この島に来て約1年になります。ここでの生活や仕事は初めてのことばかりで、日々の出来事の一つ一つがとても新鮮に感じています。島での生活を楽しみつつ、自身の経験を通じ成長も実感しており、改めて島に来て良かったと思っています。

仕事では、特定保健指導や保育園児への食育、乳幼児健診での栄養指導など世代を問わず住民の健康増進を図るための業務をしています。私の働きかけにより、検査データが改善した方や生活習慣改善について興味を示してくれる方、笑顔になってくれる方がおり、そんな方々を身近で感じられることにとってもやりがいを感じています。

私の目標は、町の健康を増進させることに加え、“食”を通して多くの人を笑顔にすることです。礼文町は漁師が多い町です。漁師は、生活リズムが不規則になることや味付けの濃いものを好むなどの課題があります。また、悪天候でフェリーが欠航になった際の食料不足やスーパーがないため気軽に食材調達ができないことも離島ならではの問題です。ですが、多

くの島民は、冷凍庫に食料をストックし、家庭菜園、フェリーが欠航しそうな時には事前に食料を買っておくなどをしています。このように決して便利とは言えませんが、想像していたよりも不便



漁業体験中③

なく過ごせています。まずは、このような島ならではの食習慣や生活の様子、健康課題等を知ることがとても大切であり、これらが住民の立場に合わせた働きかけに繋がると考えます。今すぐ改善を図ることは難しいかもしれませんが、何年か後の住民の笑顔のために粘り強く努めていきます。

話が変わりますが、8月中の3日間、大学時代の後輩である学生10名が礼文島に来てくれました。滞在期間中は、礼文ならではの経験、海の幸をたくさん堪能しました。漁業体験（漁船に乗船、ウニ剥きやホッケの網外し作業）、礼文観光、島民とBBQ、トレッキング、地域医療・福祉に関するワークショップへの参加、東京のミシュランシェフが作る礼文の食材を使用した料理の試食会に参加しました。まさに、礼文だからこそできる貴重な体験をし、良い思い出となったのではないかと思います。3日間、自然を満喫し、美味しいものを食べ、島の人との交流を通して、少しでも礼文の良さを感じ、来て良かったと思っただけいたらとても嬉しく思います。

この繋がりを活かし、今後、礼文町と天使大学で共同事業を展開できたらと思っています。礼文町としては、住民の健康への関心層の増加に繋がりたいと思っています。一方学生には、普段身近ではない離島での生活や健康問題等を学ぶことにより、自身の視野を広げるとともに、自分の経験の一つとしてなってくれたらと思います。



漁業体験中④



漁業体験中⑤



漁業体験中⑥



利尻富士をバックに記念写真

## 専門職への誓い

本学では、2年次生に対し、これまでの学びを経て、あらためて専門職業人を目指す決意を表明する式典として、栄養学科は「Food and Life Step-up Ceremony」、看護学科は「戴帽式」を行っています。

今年度は、新校舎建設工事に伴い、体育館が使用できないため、カトリック北11条教会をお借りし、挙行いたしました。

両式典とも天使大学の伝統と誇りを受け継ぎ、ろうそくの灯に「管理栄養士」「看護師」になることを誓い、今まで見守ってくださったすべての方々への感謝の気持ちを伝えました。



2019年10月11日(金)  
「Food and Life Step-up Ceremony」



2019年11月20日(水)「戴帽式」

## 国家試験合格のための祈り

2020年2月12日(水)、看護師国家試験日、管理栄養士国家試験日が近い4年次生のために、学科別に「国家試験合格祈願のためのチャペルアワー」を行いました。

「国家試験合格祈願のためのチャペルアワー」では、聖歌、聖書朗読、ケン神父様の励ましの言葉、黙想、共同祈願、ルルドの聖水による受験票及び受験生の手の祝別、アヴェ・マリアの祈り、ケン神父様と受験生による Cheer (I can do it! You can do it! We can do it!)、学科長の応援メッセージを披露しました。学生達は、目の前に迫る国家試験へ気持ちを引き締めました。



黙想中の4年次生



ケン神父様と Cheer!

## TOPICS

### 卒業生が図書を出版しました。



助産師：窪田 理珠  
(衛視科34・専攻科19回生)

『わかってもらえるかなあ？  
～あかちゃんからのメッ  
セージ～』

石田製本株式会社

メッセージ「この絵本を読  
んで下さる御母様(皆様)  
が、笑顔になりますように!!」

### 《お知らせ》

#### ホームカミングデーが開催されます。

2020年度に本学にてホームカミングデーが行われます。卒業生の皆様、ぜひご参加ください!!  
詳細は、ホームページ等をご覧ください。

### …………ご寄付のお願い…………

#### 募金名称

学校法人天使学園創立70周年・天使大学開学20周年記念事業募金  
(目標金額1億円)

#### 募金目的

学園創立70周年及び大学開学20周年記念として、次の事業を実施するため

- ・キャンパスの整備、教育研究環境の充実、奨学制度の拡充

#### 募金金額

個人の皆様:1口1万円以上(金額の多寡に拘わらずお受けいたします)  
法人の皆様:1口5万円以上(金額の多寡に拘わらずお受けいたします)

#### 申込・払込方法

本学ホームページ内にあります寄付金申込書に記入のうえ、本学の払込受付先へご郵送ください。順次、指定の払込取扱票(振込通知書)を郵送いたしますので、ご送金ください。

指定の払込取扱票をご利用いただいた場合、手数料がかりません。クレジットカードでのお支払い、コンビニエンスストア等でのお支払いも可能です。

詳しくは、申込・払込方法(インターネット)をご覧ください。

取扱窓口:天使大学事務局 財務室

TEL:011-741-1051 FAX:011-741-1077

E-mail:zaimu@tenshi.ac.jp



新棟外観

あなたの声をお聞かせください

天使大学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先/〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 天使大学広報委員会 tel.011-741-1051 fax.011-741-1077



天使大学

看護栄養学部/看護学科・栄養学科  
大学院/看護栄養学研究科  
助産研究科(専門職学位課程)

第28号 2020年3月6日 発行 天使大学広報委員会

<http://www.tenshi.ac.jp>